

私を墮とせるのはただ一人？ いや、こ  
こからが恋人だし！

【第2話】

みなぎし  
すい

【人物一覧表】

柊千咲（6）（12）（15）（現在）

：女子高生

白石彩夏：社長令嬢

柏木奈子：千咲の叔母

神谷里見：女子高生

杉園愛梨：女子高生

飯田早苗：女優

千咲の母（35）：千咲の母

男の子（15）：千咲の元カレ

里見の母（40）：医師

少女

男子A

男A

女A

○女子高・屋上（夕方）

柊千咲と飯田早苗、互いの顔をじっと見つめ合っている。

千咲M「やばいやばいばれた終わった終わった推しの女優にバレた終わった」

千咲のひたいから汗が流れる。

早苗「あなた、ずいぶんと彩夏と仲がいいよ  
うね」

千咲「あ、えっと……」

早苗「そんなに仲がいいなら、彩夏の事情も聞いているでしょう？」

千咲「事情？」

早苗「次期社長に決まって、そのためにいろいろ苦労してるって話よ」

千咲「あ、はい……全部を聞いたわけじゃないと思いますけど」

千咲M「早苗さんは彩夏と仲のいい友達なんだ。いいなあ」

早苗「それについてどう思った？ 正直に答えて」

早苗、千咲をじっと見つめる。

千咲 M 「うわああ！　これは推し女優じゃなく  
てがちがちの委員長に詰められてる！

怖い！　何言ってもかどがたちそう！」

早苗 「少なくとも今回は、正直にあなたに余  
計な不利益は生じさせないわ」

千咲 「いや怖いんですけど！　余計じゃない  
不利益ってあるんですか？」

早苗 「不利益とか、そういう余計なことを気  
にせず正直に答えなさいって言ってるのよ」

早苗、睨むような表情になる。

千咲 M 「なな、なんでこんな詰められてるわ  
け？」

千咲、おびえている。

千咲 「は、はい……えっと、大変そうだって  
思いました。わたしは昔、医者を目指して  
た事があったんですが、それで家族仲が悪  
くなってすぐ諦めました」

○（回想）終宅・居間

千咲の母（35）と千咲（12）、机をはさんで向かい合っている。

千咲の母「ねえ、ちゃんとしてっていつも言ってるでしょ！　なんでこんなにテストの点悪いのよ！」

千咲の母、千咲に怒鳴る。

千咲「ごめんなさい、ごめんなさい……」

千咲、ぼろぼろと涙を流す。

○どこかの家・居間

千咲（15）と男の子（15）、向かい合っている。

男の子「いや、めんどくさいんだよお前。いつも、弱いけど大丈夫？　とか聞いてきてさ」

千咲N「いつしか、心がボロボロになっていたわたしは他人に弱さを受け入れてもらおうとした。だけど、心のよりどころだった彼氏に振られた」

（回想終わり）

○女子高・屋上（夕方）

千咲 N 「それから男の子の考えていることが  
わからなくなつて、男の子が怖くなつて、  
女子高に入学した。それでもボロボロだつ  
た心はすぐにはもとにもどらなくて、3年  
になるまで友達がいな生活を送っていた」

千咲 「だから、彩……白石さんはすごいと思  
います」

早苗 「ええ、彩夏はすごいわ。人一倍がんば  
ってる。終、彩夏の隣にいるからにはあな  
たはそのがんばりに見合う行いをしている  
の？」

千咲 「あ……」

千咲、うつむく。

早苗 「聞く限りじゃ、すぐ諦めてしまう弱い  
人間に見えるけど」

千咲 「ご、ごめんなさい……」

千咲 N 「そうだ。わたしは、何もがんばれな  
い人間なんだ。ちよつとでも彩夏の隣にい

られると、ちよつとでも彩夏と友達でいられると思ったわがばかだった」

早苗「あたしは彩夏のことを尊敬してるの」

千咲「わかります……」

早苗「だから、隣はあたしがふさわしいと思ってる。それ相応の成績も取ってるわ。学年1位の彩夏と学年2位のあたし」

千咲「はい……」

早苗「あなたも、彩夏の隣にいたかったら精進することね」

千咲「はい……がんばります」

早苗、その場を立ち去る。

千咲、早苗の後ろ姿を見つめる。

千咲M「……あれ。結局彩夏との関係はバレたの？」

○同・3の3教室

千咲、机に向かって宿題している。

千咲「ぜんっぜんわかんない……宿題で応用問題出さないでよお」

千咲、机に突っ伏す。

千咲M「昨晚は、早苗さんにバレてるか気になって眠れなかった……」

白石彩夏「千咲ちゃん。わかんないところは

彩夏おねえさんが教えてあげるよ？ けっ

こう、おっぱいおっきいよね千咲」

彩夏、千咲の後ろに来て千咲の胸を揉む。

彩夏の指が千咲の胸の突起に触れる。

千咲「んっ！ あっ、だめ……そこっ、ああんっ、はあっ、あんっ」

千咲、息と声を漏らす。

千咲の頬が赤く染まる。

神谷里見「おまえら何やってんだよおおえ」

里見、早苗、杉園愛梨、教室に入ってくる。

千咲「イツ！」

千咲、びくんと震える。

早苗「2人とも、破廉恥行為は慎みなさい！」

彩夏「勉強教えてるのよ」



里見「どこがだよおおえ！ まさかそっち系の勉強って言うんじゃないだろうなあおおえ」

千咲「そそそんなわけないでしょ！」

彩夏「今から教えようとしてたところ」

愛梨「仲、いいんだね、うらやましい」

千咲「いやいやこれ見て仲いいって言われても困るんだけど」

早苗「終。教えをこうのはいいけれど、真面目にやりなさいよ。彩夏の時間の無駄になるでしょう」

彩夏「むー」

彩夏、むくれる。

○同・食堂

5人、食堂で昼食をとっている。

千咲M「も、求めてるんじゃないし！ 触られただけだし！」

千咲、顔が少し赤い。

千咲M「にしても、やっぱ4人とも顔面偏差

値高い。特に愛梨ちゃん。ふわふわしてて超かわいくて眼福だなあ……」

千咲、愛梨を見る。

千咲「ねえねえ愛梨ちゃん、私服ってどんな感じなの？」

愛梨「ゴスロリ」

千咲「地雷系だ……かわいい」

愛梨「えへ、ありがとう。モデルやってるから、いろんな服あるよ」

千咲「え、そうだったの？」

愛梨「うん」

千咲M「やば、やっぱすごい人ばっかじゃない？  
ね、こんど家行って私服見に行っていない？」

愛梨「千咲ちゃんの頼みだったら、いいよ……」

千咲「やったあ！　ありがとう！　LINEで予定決めようね！」

千咲、笑顔になる。

愛梨「千咲ちゃん、コミュ力高いよね。わた

しと違って」

千咲「ああ。これは友達が欲しくて焦ってる  
だけなんだよね」

千咲、ずっと真顔になる。

彩夏「大丈夫だから。ここのみんな、千咲を  
歓迎してるよ」

早苗「あたしは歓迎してないわ。彩夏の隣  
にふさわしいのはわたしよ」

千咲「推しに嫌われたあ……つらたん」

○同・校門

5人、校門をくぐる。

道路を渡ろうとする小学生くらいの少  
女。遠くから走ってくるトラック。

千咲「ん？」

千咲、女の子とトラックに気づく。

○（回想）病院・病室

院長（50）、ベッドで横になってい

る千咲（6）にゲーム機を渡す。

院長「はいこれ。がんばったご褒美」

千咲「あ、ありがとう……将来、ぜったいみんなを笑顔にできる、お医者さんになる……」

院長「そうか。じゃあ、ここで待ってようかな」

（回想終わり）

○女子高・校門

千咲「あぶないっ！」

千咲、飛び出す。少女を抱いておもいつきり飛ぶ。

鈍い音が鳴る。

トラック、止まる。

千咲「あうっ！」

千咲、倒れたまま苦しそうな表情で左足を押さえる。腕から血が出ている。

4人、千咲のところに駆け寄る。

千咲「いった……だ、大丈夫？」

少女「大丈夫。それよりおねえさんのほうが」

千咲「だ、だいじょうぶ……あうっ！」

千咲、苦しそうに歯を食いしばる。

彩夏「千咲ちゃん！」

里見「千咲！ 動くな！」

里見、スマホを取り出して救急通報する。

#### ○病院・診察室（夕方）

千咲、椅子に座って、白衣を着ている

里見の母（40）と向かい合っている。

里見の母「はい、これで終わり。幸い、重症じゃなかったわ」

千咲、左足にギプスをしている。

#### ○同・待合室（夕方）

千咲と里見、待合室の椅子に座っている。千咲、松葉杖を抱えている。

千咲M「ここ来たのは車に轢かれた時ぶりだなあ」

千咲、心の中でそんなことを思いながら、少し悲しそうな顔をする。

里見「他のみんなには、邪魔だっていつて帰ってもらったよ。悪い意味じゃなくて、安静にさせるためにな。足、大丈夫か？」

千咲「1カ月弱だって。まあこれくらいなら最悪なんとかなるよ」

千咲、明るめの表情になる。

里見「つてか、千咲すごいな。迷わずすぐ飛び出して女の子助けたじゃねえか」

千咲「……癖で」

里見「癖でこんな自己犠牲払うなよおおえ」

千咲M「あ、毒舌だ。でも、早苗さんの圧怖くない」

千咲「それ、助ける方ね？　けがなんてまっぴらごめんだから！」

里見「まあな」

里見、伸びをする。

里見「あたし、ここ入るために医者を目指してんだよ。母さんがよく言うんだけど、毒

と薬は紙一重なんだって。100パーセントの酸素が猛毒になるのも似たようなものだ」

千咲「詳しいね。酸素の話なんて漫画でしか聞いたことない」

里見「もしかして、千咲ってジョジョ読んでんのか？」

里見の顔が明るくなる。

○（回想）小学校・6の1教室

男子A「終、お前男子なのにこんなの好きなのかよ！」

千咲に向かって浴びせられる声。

千咲、机に座って、仮面ライダーのフィギュアをにぎりしめて泣いている。

男子たち、千咲を取り囲んでいる。

（回想終わり）

○病院・待合室（夕方）

千咲「男っばいやつはちよっと……」

と言ったところで、千咲の口が止まる。

千咲 M「いや、こんなことで怯えてちゃ友達なんてできない。けど、本当にいいの？」

千咲「お、面白い、かな」

里見「ジョジョ面白いよな！」

里見、ぱあっとした笑顔になる。

千咲 M「新鮮……里見ちゃんが笑顔なんて。

わたしも、友達つくるのにこんなんじゃないだめだよね」

千咲「（恐る恐る）す、好き！」

里見「そうか！」

千咲 M「ああよかった。男ものの趣味言っても大丈夫だ」

千咲「里見ちゃんとはいいお友達になれそう！」

千咲、とびっきりの笑顔を里見に向ける。

里見「千咲……」

里見、千咲をじっと見つめる。

2人、しばらく笑顔で世間話に花を咲



かせる。

里見「あたし、友達を殺されたのが悔しくて、もう二度と大事なもん失わないように医者目指してんだ」

千咲「えっ」

千咲M「なにそれ、わたしなんかよりずっと重い過去があって、わたしなんかと違ってがんばってるってことじゃん。わたしは、ちよつとのことでへこたれて。ばかみたい」

千咲、悲しい顔になる。

里見「おい！ あんま悲しい顔すんなよおおえ」

千咲「あ、大丈夫」

里見「その殺した奴、誰だと思う？」

千咲「さあ、わかんない」

里見「愛梨だよ」

千咲「……は？」

千咲、松葉杖を床に落とす。

里見、松葉杖を拾う。

里見「そろそろ帰ろうぜ」

柏木奈子、2人のもとへ駆け寄ってくる。

奈子「千咲ちゃん、お菓子買ってきたわ！

あなた、お友達ね。いつも仲良くしてくれてありがとう」

奈子、里見にお菓子を渡す。

里見「いえ、こちらこそ」

千咲M「毒舌じゃない里見ちゃんだ」

○柏木宅・居間（夜）

千咲、ゲームしている。

千咲M「めっちゃくちや気になったけど、あれは聞ける雰囲気じゃないよなあ」

○カフェ

千咲N「そして、1カ月後。わたしは無事ケガが治った」

カフェの中にたくさん客がいる。

千咲と彩夏、料理を食べている。

彩夏「デートの誘いに乗ってくれてありがとう

うね！」

千咲「あのね！ あの時好きって言ったのは、  
友達としてだから！ これだけははっきり  
させとく！ わたしは友達がほしいの！

恋人はまだ！」

彩夏「千咲……」

彩夏と千咲、見つめあう。

彩夏「そっか……そうよね」

千咲「あ、ごめん」

彩夏「なーんて。そうならそうと言ってよ！  
それなら、千咲を惚れさせるだけでも  
ね！ まだってことは、墮とせばいい。千  
咲を墮とせるのはただ1人、わたしよ！」

彩夏、にやりと笑う。

千咲「わたし女好きじゃないから！ 昔彼氏  
いたから！ ちょっとトラウマなって女子  
高来ちゃったけど」

千咲、はっとする。

千咲M「あ、しまった。また無意識に弱さを  
さらけ出しちゃった」

彩夏「そんなの今は関係ないから！」

千咲、にこつとする。

千咲「えへへ……もうっ」

彩夏「はい、あーん」

彩夏、スプーンにすくったパフェを千咲の口に近づける。

千咲、ドキツとする。

千咲、差し出されたスプーンをくわえる。

彩夏「かわいい」

千咲「もう、あんまからかわないで！」

彩夏「本気だから」

千咲「み、みんながいる場所ではわきまえてよね！」

○ 柏木宅・居間

扉が開く。

彩夏と千咲、誰もいない部屋に入る。

千咲M「まだ奈子おねえさんは帰ってきてない。買い物かな」

彩夏「ここが千咲が住んでる家かあ」

千咲M「友達だから部屋にいられても問題ないよね」

彩夏「ちーさきっ」

彩夏、千咲に抱きつく。

千咲「ちょ、彩夏？」

彩夏「どう？ あったかいでしょ？ これが人肌よ。千咲、前にいろいろあって寂しいって言ってたもんね」

千咲「そうだけど……ちよつと近すぎだつてば」

千咲の頬が少し赤くなる。

千咲M「顔だけは綺麗なんだよなあ。胸揉んできてえっちだけど……こんな迫られたら、みんな嬉しいのかな」

千咲、自分の胸の突起を触る。

彩夏の体がすつと動く。

彩夏「千咲が好きって想いが、止められないの……」

千咲「わっ」

彩夏、千咲を押し倒す。

2人の顔が近づく。

千咲「ちょ」

彩夏「いいでしょ？ わたし、自分を磨いてきたから綺麗な自信あるのよ」

彩夏、千咲と口づけをする。

千咲「んんっ！ んっ！」

千咲と彩夏の舌が濃厚に絡まっていく。

2人の頬が赤く染まる。

千咲M「こんなことしたら友達じゃなくなっちゃうのに、断れない……こ、こんなの」

2人の口が離れる。唾液が糸を引く。

彩夏、千咲のスカートの中に手を入れる。

千咲「ちょ……」

千咲、M字開脚する。

千咲M「わ、わたしはこんなこと、恋人なんて望んでないはずなのに、なんで」

彩夏、スカートの中の手を動かす。

千咲「あんっ！」

彩夏「かわいいよ千咲……」

彩夏、千咲のスカートに顔を入れても  
ぞもぞ動く。

千咲「脱がせるなっ！　そ、そこっ！　あん  
っ！　ひああああ……　そ、そこだけは舐め  
るなあっ！」

彩夏「ふう、ふう、ち、千咲の……千咲のが、  
はあ、はあっ」

千咲「これ以上は、指、舌、感じちゃって、  
我慢、できないからっ……す、ストップ……  
……」

彩夏「かわいい」

千咲「あんっ！　ああんっ！」

彩夏「ね、気持ちいい？」

千咲「いやあっ！　こんなのっ！　ちっ違っ、  
あっ、あっ！　らめええッ！　イク！　イ  
ク！　イツちゃう！」

彩夏「千咲！　千咲っ！」

千咲「も……無理！　イクっ！」

千咲、気持ちよさそうにビクビクと何

度も震える。

彩夏「好き……」

彩夏、千咲を見つめる。

2人、そのままの姿勢で固まる。

扉が開く。

奈子「千咲、ちゃん……？」

奈子、2人を見て呆然とする。

千咲「あ、奈子おねえさん。これは、違いの」

奈子、扉をそっと閉める。